

実はコレ。浜松ゆかりのモノなんです。

フロムはまつ

from HAMAMATSU!

暮らしや身近な製品・技術・サービスで
浜松発、もしくは浜松の企業が
関わっているものをピックアップ!



世界で初めて発売された鍵盤ハーモニカ
「メロディオン スーパー34」。

鍵盤 ハーモニカ

年間生産数

約 40 万本



株式会社 鈴木楽器製作所 (中区領家)

鈴木萬司が1953年にハーモニカ製造を開始し、翌1954年に株式会社鈴木楽器製作所を設立。1961年に鍵盤ハーモニカ第一号「メロディオン」を開発。現在は、鍵盤ハーモニカをはじめ、トライアングルや鈴などの打楽器、三味線や箏などの和楽器といった教育用楽器の他、プロミュージシャン向けのオルガン、ハーモニカ等を製造している。

ハーモニカのように、一人に一台
オルガンのように、音階が見える楽器

「チューリップ」くらいの曲なら、ピアノを習っていない人でも弾ける。小学校の音楽の授業で鍵盤ハーモニカを演奏したおかげだ。

鍵盤ハーモニカが教育楽器として普及したのは昭和40年代。それまではオルガンやハーモニカを使った授業が中心だった。ただ、ハーモニカには目で確認しながら演奏できる鍵盤がないため、子供たちに音階を教えるには限界があった。

鍵盤ハーモニカは当時ハーモニカを製造していた鈴木楽器製作所により、ハーモニカのように安価で、オルガンのように教えやすい鍵盤楽器を目指して開発された。鍵盤を押さえ、息を吹き込んだ時に内部で



教育用楽器として、他の楽器と合奏した際にも美しい音色にまともように設計、調律されている。

リードという小さな金属板が振動し、音が鳴る仕組みだ。子供たちが楽しく、扱いやすく、安全に演奏できるように改良され、50年以上経った今でも、小学校の音楽教育で採用されている。今やアジアを中心に海外の教育現場にも広がっているという。

久しぶりに音を出してみれば、きつと懐かしい思い出が蘇るはずだ。

大人の部活 地元の仲間

#6

大人リア充を満喫するサークルを
連載で紹介します



(左から) ホルンの田村和俊さん、ヴィオラの秋山愛美さん。
この日は降り番(おりばん/出番なし)にもかかわらず、自主練習のために
来ていたトランペットの松本麻未さん。

アマチュアオーケストラ 浜松交響楽団

厳しい要求に伝えて共に目指す
美しく優雅なハーモニカ

オーケストラはヴァイオリンなどの弦楽器、トランペットやフルートなどの管楽器、ティンパニなどの打楽器で編成される大楽団。それぞれの異なる音色が複雑に組み合わせられて奏でられる、厚みのある響きが魅力だ。

設立から44年の歴史を誇る浜松交響楽団は「はまきょう」の愛称で親しまれている。入団には厳正なオーディションがあり、アマチュア交響楽団としては全国屈指の水準にあると評価されている。団員は23歳から80歳までの110人。楽器メーカー



年2回の定期演奏会はアクティビティ浜松大ホールで開かれる。写真は、昨年3月に行われた第86回定期演奏会の様子。

に勤務する人から教員、医師、主婦まで多彩だ。練習は毎週水曜夜の2時間半、みっちり行われる。定期演奏会に向けた練習初日。集まったのはその日練習する曲の「乗り番」(出番のある人) だけでおよそ80人。仕事を終えて18時半にはオーケストラの体制で着席。近代ロシアを代表する作曲家、プロコフィエフが「ロミオとジュリエット」を題材に書いたバレエ組曲の譜読みが行われた。

譜読みは、本番に向けた練習が始まる最初に、奏者全員が集まって実際に演奏しながら楽曲のあらましを理解するために行われる。つまり初日ながら、奏者は一通り自分のパートを演奏できることが求められる。組曲の抜粋といっても、通して演奏して45分。練習指揮者の指導の下、2〜3小節ずつを合奏しては注意点を共有し、2週かけてひとわりを譜読みする。

「音程、音色、スピード感、音の表情など、時には指揮者から厳しい要求が飛ぶこともあります。全ては本番のため。私にとっては有名な指揮者やソリストとの共演が大きなモチベーションの一つです」(松本さん)